

博士論文内容の要旨及び博士論文審査結果の要旨

氏名(生年月日)	小島 一範	(****年**月**日)
本籍	*****	
学位(専攻分野)	博士(リハビリテーション学)	
学位授与番号	甲第146号	
学位授与日付	平成29年3月14日	
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当	
論文題目	在宅系リハビリテーション利用者の QOL 調査及びバランス評価に関する研究	
審査委員	教授 井上 桂子	教授 古我 知成
	教授 渡邊 進	

博士論文内容の要旨

本研究の目的は、在宅系リハビリテーションの効果判定のためのエビデンスを積み重ねることである。本論文は、3つの研究から構成されている。第1章では、3ヶ月の訪問リハビリテーションにおけるADLとQOLとの関係性及び利用による変化を6施設共同で調査した。その結果、PGC-MS (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale) は訪問リハビリテーション利用によって有意な変化がなかったこと、ADL満足度は訪問リハビリテーション利用により向上する傾向が得られたこと、ADL遂行状況とADL満足度との間に強い相関が見られたことが分かった。第2章では、訪問リハビリテーション利用者における足趾把持力と片脚立位時間との関係について検討した。その結果、足趾把持力と片脚立位時間は、有意な強い相関を示した。この結果は、片脚立位でのバランスには足趾把持力が影響を及ぼしていることを示唆するものであった。第3章では、通所介護サービス利用者に対して、2ステップテストを含めたバランス能力に関連する評価を行った。その結果、2ステップ値とTUG (Timed up and go test)との間及び2ステップ値と片脚立位時間との間に強い相関を認めた。2ステップテストがバランス能力の一つの指標となり得ることが明らかとなった。

博士論文審査結果の要旨

本研究は在宅系リハビリテーション利用者の抱える問題やリハビリテーションの効果に関するものであり、今後ますます増えると考えられる訪問リハビリテーションにスポットをあてたものである。論文発表会は、予備審査会で指摘された問題を一つ一つ丁寧に解決し、説明を加えてあり、説得力がある内容であり、優れていた。論文も、それらを反映したものに改訂されていた。また広い視点に立った多くの文献を的確に引用しており、リハビリテーション学の博士論文として十分価値あるものに仕上がっていると考えられる。論文内容は、権威ある学術雑誌2編(英文誌1編、和文誌1編)に掲載・受理されており、質は十分保障されている。審査の結果、本論文は博士論文に十分に値し、合格と判定された。